

Living Donor Kidney Transplantation Preceding Pancreas Transplantation Reduces Mortality in Type1 Diabetics with End-stage Renal Disease

加来, 啓三

<https://doi.org/10.15017/1500600>

出版情報：九州大学，2014，博士（医学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



(別紙様式 2)

氏 名	加来 啓三			
論 文 名	Living Donor Kidney Transplantation Preceding Pancreas Transplantation Reduces Mortality in Type 1 Diabetic with End-stage Renal Disease			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	田口 智章
	副 査	九州大学	教授	外 須美夫
	副 査	九州大学	教授	北園 孝成

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【背景】膵腎同時移植(simultaneous pancreas-kidney transplantation : SPK)は、末期腎不全を伴った 1 型糖尿病患者に対する唯一の根治治療である。しかし、本邦では脳死ドナーが不足しているため、SPK 待機中の死亡率が高い。そこで、SPK 待機中の 1 型糖尿病患者の死亡リスク因子を解析するとともに、脳死膵移植に先行した生体腎移植(living donor kidney transplantation : LDK)が、SPK 待機患者の死亡率を低下させ得るかどうかの検討を行った。

【対象と方法】1 型糖尿病患者 71 例を後視方的に解析した。26 例に SPK、15 例に LDK が施行され、30 例が SPK 待機中であつた。各群の生存率とともに、SPK と LDK に関しては移植腎生着率についても後視方的に解析した。また、SPK 登録待機患者の死亡率に寄与するリスク因子に関し、Cox の比例ハザードモデルを用いて解析を行った。

【結果】5 年累積生存得率は SPK 100% vs LDK 93.3%($P=0.19$)であつた。5 年腎生着率は SPK95.7% vs LDK100%($P=0.46$)であつた。SPK 待機中の 5 年累積生存率は 77.7%であつた。透析期間のみが単変量、多変量解析ともに統計学的有意差を示し、SPK 登録待機患者の生存率に寄与する独立した危険因子であつた。

【結論】LDK、SPK の生存率、腎生着率には差はない一方で、SPK 待機中の生存率は年を追うごとに低下する。透析期間が SPK 登録待機患者の生存率における唯一の独立した危険因子であることから、脳死膵移植に先行した LDK は末期腎不全を伴った 1 型糖尿病患者に対する有用な治療選択肢と考えられる。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め、各調査委員により専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項につき種々の質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。